

歯周病 細菌の毒素で炎症や出血、早産のリスクも上昇

◆細菌の毒素で炎症や出血、早産のリスクも上昇

◇磨こう！妊婦さんー進みやすい症状、口内を清潔に

◇まずは歯石除去、重度なら切開

「赤いものを取るように磨いてくださいね」。岡山市に住む妊娠8カ月の主婦、倉田美由紀さん(26)は先月下旬、歯肉炎の治療で歯科衛生士から歯磨きの指導を受けた。「赤いもの」とは、赤い染色液で染まった細菌の塊のプラーク(歯垢(しこう))だ。「自分のブラッシングでは、どこが磨き足りないかを覚えてもらいます」。歯科衛生士が説明した。

倉田さんが通う同市のハロー歯科(滝川雅之院長)は、年間約1000人が出産する産婦人科「三宅医院」に併設されている。小児を除く初診患者の約3割が妊婦で、滝川院長は約8年前から、三宅医院の「出産準備クラス」で歯の治療や歯磨きの大切さを説明してきた。倉田さんもこのクラスで「歯周病の妊婦は早産や低体重児出産のリスクが高い」と説明され、治療を始めた。

倉田さんは「少しでも早産のリスクを減らせるならと思って。以前は麻酔や薬がおなかの赤ちゃんに影響すると嫌だから歯医者には行かなかった」と言う。滝川院長は「妊娠すると歯茎が腫れやすくなり、女性ホルモンを好む歯周病菌も増殖する。つわりがひどく、歯磨きができないという人もいる。妊娠中でも指導や治療は受けられる。赤ちゃんのためにも歯科に来てほしい」と呼びかけている。

歯周病は、以前は歯槽(しそう)膿漏(のうろう)と呼ばれていた病気で、歯を支える歯槽骨や歯茎などの病気の総称だ。プラーク中の細菌が毒素を出し、歯茎に炎症が起きて赤く腫れたり、血が出やすくなった状態が歯肉炎。歯槽骨まで炎症が進んだ歯周炎になると、歯槽骨が破壊され、最終的に歯が抜け落ちる。痛みなどの自覚症状が少なく、知らないうちに症状が進むのが特徴だ。

歯周病の治療は、細菌を取り除き、進行を止めるのが基本。歯肉炎や軽い歯周炎は、歯磨きと歯石の除去、歯の表面を滑らかにする処置で症状は改善に向かう。

症状が重い歯周炎は、歯茎を切って歯周ポケットの奥の歯石の除去などを行う外科治療の対象になることもある。しかし、破壊された歯槽骨や、歯と骨の間の膜はそのままでは元の形に戻らない。現在、これらの組織を再生させる治療法の開発も進んでいる。

厚生労働省の調査によると、30歳以上の各年齢層で8割以上が歯周病だった。また、15歳以上の28・8%は「進行した歯周炎」だという。

最近の研究で、歯周病は歯が抜けるだけでなく、糖尿病や肺炎、心臓病、動脈硬化、早産、低体重児出産などのリスクを高めることが分かってきた。早産と低体重児出産については、96年に米国の研究グループが指摘した。歯周病の人はそうでない人に比べ、早産と低体重児出産のリスクが7・5倍になるとの結果だった。一部に関連性がないとの報告もあるが、その後も関連性を示す論文が相次いでいる。

東京医科歯科大の和泉雄一教授によると、炎症が起きると、主に免疫細胞で、体を守るための炎症性の物質が作られる。歯周病によって起きる全身への影響は、過剰に作られた炎症性の物質が血液で運ばれるためである可能性があるという。

和泉教授は「中等度以上の歯周炎の患者の歯と歯茎の間には、小さなかいようがたくさんある。合計すると、手のひらぐらいの面積になる。胃かいようだったら重症だ」と説明する。

歯周病と早産の関係について、産婦人科医の意識はまだ高いとは言い切れないのが実情だ。

電動歯ブラシを販売するフィリップスエレクトロニクスジャパンが今年4月、日本産科婦人科学会で開いたセミナーに参加した産婦人科医約200人に調査をしたところ、「関係を詳しく知っていた」との回答は9%。「ある程度知っていた」が62%いたものの、3割は知識が乏しかった。

セミナーでは、口腔(こうくう)ケアの指導で早産のリスクが減ることを示した米国の研究が紹介された。歯周病の妊婦を無作為に2グループに分け、一方には歯の磨き方などの指導を行い、一方には指導しなかった。その結果、妊娠37週未満に出産する早産の割合が、指導しないグループ(34人)では44%だったが、指導したグループ(40人)では26%だった。

和泉教授は「歯周病が治療しなくてはいけない病気と知らない人が多い。特に、妊娠を計画していたり、妊娠した女性は、積極的に口腔ケアの指導や治療を受けてほしい」と指摘している。【根本毅】